

VietGeo 2016 参加報告

副会長 茶石貴夫
国際委員長 伊藤久敏

1. はじめに

ベトナム国立大学(VNU), ベトナム応用地質学会と日本応用地質学会の共催による国際会議「VietGeo 2016」が2016年11月22日(火)～23日(水)にベトナムのハロン市で開催された。本国際会議は、昨年、日本応用地質学会が京都で開催した国際会議(第10回アジアシンポジウム)がきっかけとなり、共同開催に至ったものである。会議全体の参加者は約80名で、参加国はベトナム、日本、中国、スイスなどであった(中国、スイスからは各1名程度参加)。日本からは、ブース展示の関係者を含め、13人(非会員含む)の参加があった。以下に会議の概要等を報告する。

2. 会議(11月22日開催)の概要

会議はハロン市の Muong Thanh Quang Ninh Hotel の一室で開催された。なお、当初は別のホテルで開催予定であったが、ブース展示などの収入が増えたため、より豪華な会場に変更したとのことであった。受付で講演要旨をまとめた分厚い本を渡されたが電子データ(USBメモリ)の提供はなかった。

開会式では、ベトナム応用地質学会会長の Ta Duc Thinh 氏ほか2名の挨拶のあと、日本応用地質学会を代表して茶石(副会長)が挨拶を行った。

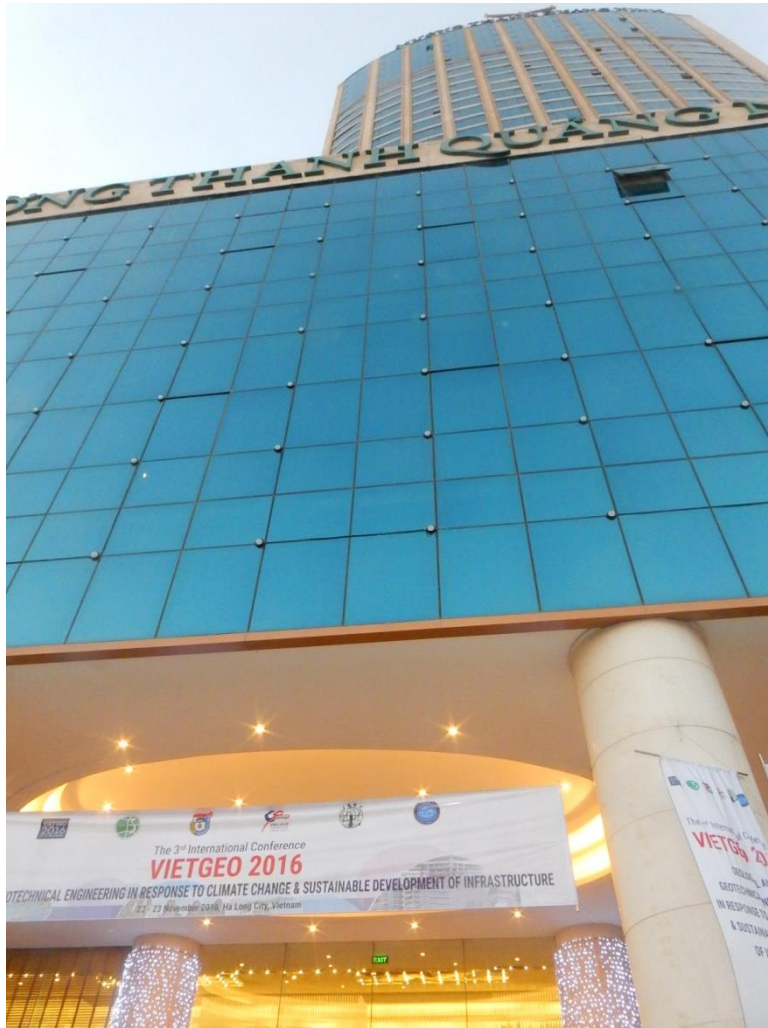


写真-1 VietGeo 2016 の会場のホテル

ベトナムは、長い海岸線を有する国家であり、そのため、地球温暖化等による海岸浸食が問題となっており、今回の会議のテーマも地球温暖化が及ぼす地質工学的課題に関するもので「Geological and geotechnical engineering in response to climate change and sustainable development of infrastructure」であった。会議は3件のキーノートスピーチ(うち1件は大塚前副会長によるもの)と4件のセッション(Climate change impacts and the adaption ; Engineering geology for sustainable development of infrastructure ; Landslides ; Environmental geotechnics)からなっていた。キャンセルがいくつもあり、結局16件の口頭発表が行われ、ほぼ予定通りの時間で会議を終了した。

発表内容は、ベトナム側は大部分が海岸浸食や平野の地下水に関するもので、構造物の基礎や防災に関連するものは少なく、日本人参加者の発表内容とは少しずれがあった。しかしながら、日本応用地質学会で言えば、地下水研究部会や廃棄物関係等が取り組んでいる内容に大いに関係する分野と思われ、ベトナムの若手が次々

に発表するのを見て日本の若手からもその分野の発表があれば良かった、と痛切に感じた。

会議の雰囲気は、午前中は比較的緊張感が保たれたが、午後は欠席者も目立ち、やや集中力に欠ける感があった。会議中にスマホが鳴り出し、席を立たずにその場で会話をするという、日本ではめったに見掛けない場面にも何度か遭遇した。そのような雰囲気であるから、逆に英語の発表が不慣れな日本の若手会員でも比較的気軽に参加できるのでは、とも思った。

ブース展示は2件のみであったが、そのうちの1件は日本のESA(アース・スキャンニング研究会)によるもので、ブース前には本物のボアホールスキャナが展示され、盛況であった。



写真-2 ESA によるブース展示

閉会式では、伊藤(国際委員長)より、日本応用地質学会は、来年11月にネパールで開催される第11回アジアシンポジウムにも大いに協力していくので、ベトナムからも積極的な参加をお願いする旨の発言を行った。



写真-3 閉会式後の VietGeo 2016 会場にて 会員のみ左から 2 人目より武田, 山本, 小島(元会長), 大塚(前副会長), 茶石, 2 人置いて伊藤.

3. 現地見学会(11月23日開催)の概要

会議の翌日, 世界遺産でもあるハロン湾を貸し切りの船で巡った. ハロン湾には石灰岩が浸食されてできた多数の島があり, 一部の島に上陸して鍾乳洞も見学することができた. 会議の参加者は, 船外の景色を楽しみながら昼食を囲むなど, 打ち解けた雰囲気です親交を深めることができた. なお, 当日は, 日中の気温が 30°C 近くまで上がり軽装で十分であった.



写真-3 ハロン湾巡りの船に乗り込む参加者

4. あとがき

ベトナム側主催者の周到な準備により、滞りなく VietGeo 2016 が開催された。日本応用地質学会は、共催者の立場であり、国際委員会が目標とした 10 名の参加を超える日本人参加者を得たことは大変良かった。何より、ブース展示を実施して頂いた ESA の関係者にはこの場を借りて感謝申し上げたい。今回の会議を通し、ベトナムが抱える応用地質学的課題を知ることができ、また、多くのベトナム人研究者と親交を深めることができた。今後もこのような国際的な活動の場を広げていくべきであると感じた。今回、若手の会員の参加がほとんどなかったが、「田中治雄国際積立金を用いた海外での学会発表支援」(詳細は学会 HP 参照)なども活用し、若手会員の積極的な国際会議への参加を期待したい。